



ブラジル特報

特集「ブラジルの酒革命」

- ・新たな価値観を市場に提示するプレミアム酒（ビール、カシャッサ、ジン、ワイン）
- ・『カシャッサ・カウンスル・ジャパン』とはカシャッサの魅力を広めたい
- ・カシャッサとカイピリーニャをめぐる三酔人歴史問答

No.1646
2018年9月号

あの町この町
マリンガ Maringa



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁



世界の未来を、ブラジルとつくる。

〔Business innovation-1〕

鉄鉱石を安定供給し、世界経済の発展を支える。
ヴァーレ社を通じ、世界最高水準の高品位鉄鉱石を供給。増大する鉄鋼需要に応える。

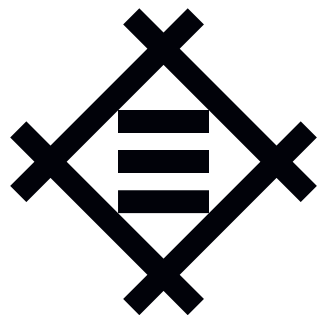
〔Business innovation-2〕

水力発電事業を通じ、低炭素社会へのインフラ構築に貢献。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

〔Business innovation-3〕

ブラジルで、そして世界へ。コーヒーと共に至福のひとときを。
Mitsui Alimentos社を通じ、半世紀にわたり愛される「Café Brasileiro」を製造・販売。
これからも豊かな食文化をお届けする。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

あの町この町 マリンガ [山口達朗]	3
ブラジル・ナウ 国民の期待に応えられなかったセレソン [沢田啓明]	5
【特集】ブラジルの酒革命 新たな価値観を市場に提示するプレミアム酒 (ビール、カシャッサ、ジン、ワイン) [麻生雅人]	6
【特集】ブラジルの酒革命 『カシャッサ・カウンスル・ジャパン』とは カシャッサの魅力を広めたい [本田賢一郎]	8
【特集】ブラジルの酒革命 カシャッサとカイピリーニャをめぐる 三酔人歴史問答 [編集部]	10
ブラジル現地報告 将棋の未来とブラジル [石川達也]	12
連載・日系企業シリーズ第54回 商船三井 [大胡俊武]	13
連載・ビジネス法務の肝 ブラジルの販売代理店契約に関する法律 [柏 健吾]	14
連載・税務の勘どころ 社会負担金(PIS/COFINS)の課税標準額の決定 [ルシオ・バストス / 吉田幸司 / 菊元崇]	15
エッセイ ブラジル文学を楽しむために [武田千香]	16
ウーマン・アイ 普段の食事で味わうサンパウロの文化・歴史 [水谷俊江]	17
ジャーナリストの旅路 変わる南米と変わらぬ南米 [本蔵一茂]	17
連載・文化評論 ボレミックにして貴重なドキュメンタリー映画 『ディヴァイン・ディーバ』 [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書・新盤紹介	20
連載・びっくり豆知識 ブラジルが「普通に」勝てる時代は終わった	20
協会からのお知らせ	21



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「アマゾン川最大の支流マテイラ川沿いの村で、川遊びを終えてココナッツの実を抱える子どもたち。中身の白い半透明のジュースはビタミン・ミネラルが豊富。川を船で下ると、川から金を採取するガリンベイロたちの姿もあった」
(永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(偕成社)等。www.hikarunagatake.com)

マリンガ Maringa

マリア・ド・インガの歌が、町の名前の由来とされる「歌の町」、マリンガは、パラナ州北西部の計画都市で、空気がきれいで安全で清潔な住みやすい都市として知られている。パラナ州第3の都市で、人口約40万人のうち、日系人が約3万人住んでおり、人口当たりの日本食レストランの数が他の都市に比べてとても多く、日本食を始め、日本の文化が町に根付いている。マリンガ文化体育協会のYOSAKOIソーラン部は、この7月に行われた世界最大のダンス・フェスティバル「第36回ジョインヴィレ・ダンス・フェスティバル」のポピュラー・ダンス部門において2度目の優勝を果たしている。

マリンガ市のシンボル、高さ124メートルの円錐形の大聖堂は、南米にある大聖堂のうちで最も高く、市の中心部に位置し、周辺は市民の憩いの場となっている。南米最大規模のマリンガ日本公園、そして、インガ公園の日本庭園、除夜の鐘で知られるマリンガ日伯寺など、日本との深いつながりを感じるマリンガ市は、兵庫県加古川市と姉妹都市提携を結び45年となる。マリンガ市には加古川通りが、加古川市にはマリンガ通りと名付けられた道路があり、チタン製のカテドラルのレプリカがあるなど様々な交流が行われてきている。



グリーン・シティとも呼ばれ、緑が多く、市民4人当たり一本の木がある。都市が建設された際に、ジャカラнда(紫色の花)や、シビビルナ(黄色い花)、イッペー(ピンクと、黄色い花)、クアレズメイラ(紫色の花)、フランボイアン(オレンジ色の花)などといった街路樹を通りごとに植えたため、それぞれの通りに、同じ色の花が一斉に咲く街並みが美しい。

2018年、ブラジル日本移民110周年を記念して、パラナ州では、マリンガ市で、7月19日から22日にかけて、「EXPO-IMIN110」(移民110年エクスポ)がエクスポ会場内で開催され、眞子内親王殿下が式典に臨席された。4日間で約8万人が来場。ファッションショー、YOSAKOIソーラン、eスポーツ大会、盆踊り、コスプレ・コンテスト、和太鼓集団鬼太鼓座によるワークショップ、ブラジル歌謡協会主催のブラジル選抜歌謡大会、日系企業約40社などによる展示のほか、農林水産省による日本食ワークショップも開催された。



山口達朗 (中央開発㈱)

▲移民110年エクスポ

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR
AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

国民の期待に応えられなかったセレソン

ワールドカップ(W杯)・ロシア大会準々決勝でブラジルが敗退した翌日(7月7日)のサンパウロの日刊紙「オ・エスタド・デ・サンパウロ」の一面は、抱き合って喜ぶベルギー選手を尻目にブラジルのエース・ネイマールがユニフォームで顔を覆っている写真と「ブラジルが現実に戻り始める」の見出し。「セレソン(ブラジル代表)がW杯から敗退し、ブラジル人は危機に喘ぐこの国の現実と再び向き合う」と伝えている。

今年5月末に燃料価格高騰に抗議するトラック運転手らが大規模ストを行なって物流が大混乱に陥ったことに象徴されるように、この国では政治と経済の混乱が続いている。6月14日から7月15日まで行なわれたW杯は国民がつかの間の喜びを感じ、ブラジル人としての誇りを取り戻す数少ないチャンスだったが、セレソンは国民の期待に応えることができなかった。

監督はドゥンガからチッチへ

2014年の自国開催のW杯では、優勝を目指しながら準決勝でドイツに1-7と大敗し、3位決定戦でもオランダに完敗を喫して4位。大会後、元ブラジル代表MFドゥンガが監督に就任したが、W杯南米予選の第6節終了時点で参加10カ国中6位と低迷した。2016年6月、ドゥンガが解任され、サンパウロの名門コリンチャンス率いて2012年にクラブ世界王者に輝いた実績を持つチッチが後任に指名された。チッチは個人技に頼らず攻守両面で組織的にプレーする近代的な戦術を植え付け、W杯南米予選を圧倒的な強さで勝ち上がった。その後の欧州遠征でも2014年大会の覇者ドイツ、東欧の強豪クロアチア(今大会で準優勝)、開催国ロシア(今大会でベスト8)などを撃破。大会前は、ドイツ、フランス、スペインなどと並んで優勝候補に挙げられた。

しかし、大会前、セレソンをいくつかのアクシデントが襲う。2月末、ネイマールが右足首を骨折し、手術を経て長期間のリハビリを余儀なくされた。また、大会直前に右SBダニエル・アウベスが故障して欠場。さらに、数人の選手が故障を抱えた状態で6月下旬からの合宿に参加するなど、チーム状態は万全ではなかった。

敗因は戦術でなくメンタル

1次リーグ最初のスイス戦では、相手の堅守に攻撃を封じられて1-1の引き分け。続くコスタリカ戦でも人数をかけた守備に苦しめられたが、追加タイムのMFコウチーニョと

ネイマールの得点で勝ち切った。これで選手たちが精神的に楽になり、セルビア戦では伸び伸びとプレーして2-0の勝利。決勝トーナメント1回戦ではメキシコと対戦し、ネイマールの1得点1アシストの活躍で快勝した。主力選手が徐々に調子を上げ、ドイツ、スペイン、アルゼンチンなどの強豪が早々と敗退したことから、優勝への道が大きく開けたと思われる。ところが、準々決勝の前半、ベルギーにセットプレーとカウンターからまさかの2失点。後半、猛反撃して1点を返し、なおも多くの決定機を作ったが、再三のシュートミスと相手GKの好守に阻まれ、1-2で敗れた。

ブラジルの最大の敗因は、戦術や技術ではなくメンタルにあったのではないかと。ネイマールが体調不良から思い通りのプレーができず、苛立ちを隠せなかった。エースの不安定な心理状態が他の選手にも伝染し、ミスの連鎖反応を引き起こした。動揺した選手たちを落ち着かせることができる強力なリーダーもいなかった。

2014年大会準決勝でドイツに大敗した最大の理由は、先制されたことで選手たちがパニック状態になり、普段ではありえないようなミスを連発したこと。チッチ監督は選手との対話を通じてメンタル強化を図り、試合の度に主将を変えてできるだけ多くの選手に主力としての自覚を植え付けようとした。その試みはある程度成功していたと思われるが、勝負所で再び精神的な弱さを露呈してしまった。

今後の展望

ただし、敗れたベルギー戦も含め、すべての試合でブラジルらしい攻撃的なスタイルを貫いたのは救いだった。チッチ監督のチーム作りの方向性が正しいことは国内メディアと国民の多くが認めており、ブラジルサッカー連盟は留任を望んでいる。チッチが承諾すれば、ブラジルとしては珍しく、長期的な視野での継続的な強化が期待できる。

今後は、守備陣の世代交代が急務だ。また、最後に優勝した2002年大会以後の4大会で欧州勢の前に敗退しており、優勝国もすべて欧州勢。さらに、今大会は欧州勢がベスト4を独占した。今後、ブラジルは欧州の強豪国とできるだけ多くの強化試合を組み、世界最先端の戦術やチーム作りを参考にしながら強化を進めていくべきだろう。

沢田啓明(サッカージャーナリスト)

新たな価値観を市場に提示する プレミアム酒(ビール、カシャッサ、ジン、ワイン)



麻生雅人
(カシャッサ・カウンシル主任研究員)

2018年8月初旬の時点で、ブラジルのアルコール飲料業界で景気のいい話題を続々と提供しているのは、中小企業による「手作り」酒造だ。商品でいえば、クラフトビール、クラフトカシャッサ、そして2017年からこの分野に現われ急成長しているクラフトジンだ。本稿では、近年同国で注目を集めているこれらのプレミアム小規模生産酒の動向をお伝えしたい。

誤解を招かないように念のためにはじめに記すが、プレミアムクラスの酒類の売り上げはブラジルの酒類全体の市場からみればまだまだ小さなものだ。ビールならアンタルチカやブラーマ、カシャッサなら51やベリーヨ・バハイロ、イピオカなど大衆的なブランドは今も国中で広く親しまれている。

そもそもプレミアム酒は価格も割高だ。スーパーマーケット「パン・デ・アスーカル」でビールやカシャッサの価格を比べると「アンタルチカ」(オリジナル)600ml瓶が7.49リアルに対しクラフトビールの「トゥピニキン」600ml瓶が23.90リアル。お馴染み「51」965mlが7.69リアルなのに対しクラフトカシャッサの「サントグラウ」750ml瓶が

59.90リアル(2018年8月現在)。無論より高額なものもある。にもかかわらずプレミアム酒は国内外で新たな市場を開拓しながら、ここ数年の経済危機をも跳ね返して成長し続けている。

クラフトビール市場

ブラジルにおけるクラフトビールと大衆的なビールとの最大の違いは、後者が比較的薄味なのに対し、前者は味が濃く、アルコール度数も高めだ。

クラフトビールのもうひとつの大きな特徴は、各ブランドが、カスターニャ・ド・バラ(ブラジルナッツ)、マンジョッカ芋など、ブラジルならではの材料を使って競い合うように個性的なフレーバーを打ち出している点だ。生産者は南部と南東部に集中(全体の80%を占めている)しているものの、ほぼ全州に製造者がいるため、パラ州ベレンならアサイヤークブアス、同州サンタレンならムルシ(アセロラの親戚)、ゴイアス州ならペキーなど、各地で特産品を使った“ご当地ビール”が作られている。

農牧食糧供給省によると国内のクラフトビールのメーカー数は2010年(266軒)以降右肩上がりをしており、2014年が356軒、2017年は679軒だった。経済危機のさなかであるにもかかわらず、2016年(493軒)からは1年で186軒増えている。

ニールセンによると、2017年は国内のビールの販売量は1.7%減となったにもかかわらず収益は

1.6%増加したという。高価格帯のプレミアム・ビールの売り上げが増加した結果がこの数字に表われていると考えられる。

ブラジル・クラフトビール協会によると、クラフトビールメーカーのほとんどは従業員の少ない中小メーカーだが、この分野での就業人数は増加しているという。2015年以降、従業員が99名以上のビールメーカーでは1184件職が失われたのに対し、99名以下のメーカーでは1549の求職があった。

ブラジル・クラフトビール協会のカルロ・ラポリ代表によると、実際にクラフトビール製造に従事する人の数は、上記の数字をさらに上回ると指摘している。製品として販売することはできないが家庭でクラフトビールづくりを始める愛好家が増えているが、そんな文字通り“自家製”ビールを製造する愛好家の中には、好評を受けて正式に届を出して、自分のレシピのビールを第三者のメーカーに生産してもらい、自身のブランドとして販売を始める者もいるが、その数は正確には統計に含まれていない。とはいえこうした委託製造型業者は近年では“ジブシー酒造”と呼ばれトレンドになりつつある。

クラフトカシャッサ

ブラジルクシャッサ研究所によると同国のカシャッサ生産者は4万、ブランドは4000あるという。うち98%が中小規模のメーカー、つまりクラフトカシャッサの生産者だという。クラフトカシャッサと大衆酒のカシャッサとの一番の違いは、少量生産の手作り製品と大量生産の工業製品との、製造工程の違いだ。

クラフトカシャッサはサトウキビを伐採後、約12時間以内に発酵させて、蒸留を行う。蒸留は銅製の蒸留器で行われ



パラナ州「ボルトモヘッス」の蒸留所。
銅製の蒸留器

るが、蒸留直後の約10%と蒸留終了間際の約10%(前者はカベッサ、後者はカウダと呼ばれ、蒸留所によってパーセンテージは前後する)をそれぞれ除けた部分(コラソンと呼ばれる)のみを瓶詰する。贅沢な、文字通りプレミアムな酒だ。工業製品は工業製品で、カイピリーニャのベースとして世界中で愛されているが、クラフトカシャッサはストレートで少量を、じっくりと味わいながら飲むという楽しみ方が多い。昔ながらの製法で丁寧に造られるクラフトカシャッサは、実に口当たりもまろやかで香り高く、すっきりとした味わいだ。

さらにクラフトカシャッサの多くは、蒸留後に木の樽で寝かせて熟成の過程を経ることで、より香り高く、琥珀色の見た目も楽しめる酒へと生まれ変わる。熟成に使う樽の木の素材によっても、寝かせる時間によっても、味や香りは変わる。1種類の木の樽で寝かせた後にさらに異なる木の樽で寝かせれば、カシャッサはより複雑でミステリアスな表情となる。こうして各メーカーは個性を競い合えるというわけだ。

しかしクラフトカシャッサだけがプレミアムカシャッサというわけではない。大衆酒として売り出されている工業製品のカシャッサのブランドも、木の樽で熟成させることで気品あふれる酒へと変身させたプレミアム・ラインを手掛けている。例えばベリーヨ・バハイロは、10年熟成させた「オウロ」や、手作りカシャッサをブランドしてオークとジェキチバホーザという2種類の木の樽で寝かした「ダイヤモンド」というプレミアムカシャッサを作って話題になった。

残念ながらカシャッサの国内消費量は近年の経済危機の影響を受けて打撃をこうむっている。ユーロモニター・インター

ナショナルによると2015年から2017年にかけて3年連続で下降している。しかしペー

リョ・バハイロだけでなく大手メーカーはプレミアムカシャッサ市場への投資に積極的だ。イピオカを扱うディアジオも「オウロ」、「シンコ・シャヴィス」といったプレミアム酒を投入した。

企業がプレミアムカシャッサへの投資を促進する背景には、経済危機以降の外食産業の市場縮小がある。報道ベースの数字ではあるが経済紙「ヴァロール」(2017年9月)によると、低価格帯の大衆酒は約90%が酒場で消費されるのに対しプレミアムカシャッサは60~65%が酒場で消費されており、小売りでの市場が大きい。ディアジオ社のアウヴァロ・ガルシア・マーケティング主任は、経済危機以降に外食から内食へと消費が移行する中、家庭でバーのように酒を楽しむ層が増えており、2015年から2016年にかけては小売りが25~26%成長しており、消費されているのは付加価値の高い商品だという。

クラフトカシャッサも同様だ。例えばミナスジェライス州産の人気クラフトカシャッサ「サリニッシマ」や「サントグラウ」を製造するナチッキ酒造は2017年に25%の売り上げ増見込みを発表している。

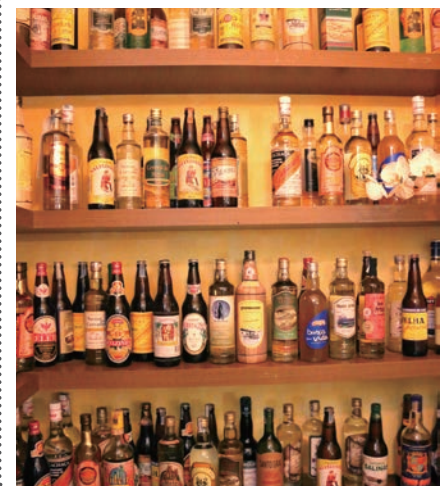
クラフトジン、プレミアムワイン

ブラジルワイン研究所(Ibravin)のマルセロ・フェハリー副代表は、1人当たりの1年に飲むワインの量は、アルゼンチンでは25リットルだがブラジルでは1.8リットルで、品質のいい国産ワインが作られていることがまだ国中で認知されていないことが原因だと指摘している。しかし日本にも輸入されている「サルトン」、「カーザ・ベリーニ」、「ガリバルディ」、「ミオーロ」などのプレミアム

ワインの注目度は高まっている。

さて、2017年以降、ブラジルのプレミアム酒市場で赤丸急上昇中なのがクラフトジンだ。世界的なブームと同時進行でシーンは動いている。ジンは、大まかには、ジェニパーベリーを使いその香りを主とする蒸留酒であれば、ベースとなる酒の原料は問われない。さらに、他にフレーバーを加味しても構わないという自由度の高い酒だ。

クラフトカシャッサで蒸留酒づくりのノウハウやインフラが整っており、クラフトビールのブームでボタニカルなど当地フレーバーに注目が集まっているブラジルで、クラフトジンが流行らない理由が、むしろ見当たらない。本稿を執筆している時点で12ブランドが流通しており、ビール同様、クマルー、パコヴァといったブラジルならではのハーブや果実、ナッツ類のフレーバーを、各ブランドが競い合うように使っている。リオグランデ・ド・スール州のクラフトカシャッサの名門ウェーバーハウスもクラフトジンを製造しているが、ガウーショらしくマテ茶の葉をフレーバーに使っている。オランダを経てイギリス経由で伝来した外来文化に、土着のフレーバーを混ぜ込んでブラジルにしかないものを生み出すことができるクラフトジン造りはブラジル人の、もっとも得意とするところなのではないかと筆者は思っている。そのアロマの中には混交文化をルーツにもつブラジル人のアイデンティティが誇らしげに香り立っている。



銘酒の郷ともいえるミナスジェライス州産のカシャッサ・アルテザナウ

『カシャッサ・カウンスル・ジャパン』とは カシャッサの魅力を広めたい



本田賢一郎
(カシャッサ・カウンスル・ジャパン/
当協会理事)

カシャッサ・カウンスルの活動について、この誌面を借りてご紹介してみたい。お酒がらみのお話なので、内容については“水増し”ではなく、純度の高い“増量”でいきたいのだが、いかんせん酒飲み話だから、途中で千鳥足のようになってしまうかもしれず、この辺は、あらかじめご海容のほどお願いしたい。

設立の目的

時は2016年の年末、日本にブラジル発祥の蒸留酒である「カシャッサ」をもっと普及させようという発起人らのアイデアからスタートし、任意団体として動き始めておおよそ1年半が経過した。

発起人の呼びかけとそのアイデアに賛同し集まった、様々な分野で活動する各メンバーが持つ得意分野を発揮して、少しずつながら歩みを進めている『カシャッサ・カウンスル・ジャパン』。設立に携わったメンバーは往々にして真面目かつ働き盛りの年代であり、また、アルコールを飲むこと自体には弱いという傾向があるように見受けられるが、特に「ブラジル」に対する想いや愛情が強いメンバーばかりが集まっているという印象である。この場ではメンバーの紹介は割愛させていただくが。

カシャッサ・カウンスル、というネーミングについては最後に述べることにして、『カシャッサ・カウンスル・ジャパン』の設立目的は主だったところでは以下のとおりである。

- ・カシャッサの普及及び宣伝
- ・カシャッサに関するブラジル現地における調査、情報収集
- ・カシャッサのブラジル本国の関係諸団体との連絡、折衝
- 特に日本においては、ラム酒やウォッ

カナなどのスピリッツ系飲料の知名度と比較すると、このブラジル発祥のカシャッサ(ピング)、そしてそこから作られる我々にはなじみの深いカクテル、「カイピリーニャ」のイメージが極端に弱いところから話が膨らみ、団体の設立へと至ることになるのだが、カウンスルとしての活動を通じた究極的な目標到達地点は、例えば都会のOLさんたちが会社帰りに一杯ひっかけるときの「オシャンティ」なカクテルが「カイピリーニャ」になる、とか、夏フェスに繰り出す若者や、海に繰り出すメンズの片手には、モヒートではなく「カイピリーニャ」がある、とか、ダンディな男性がガウンを羽織り、グラスを揺らす、そのグラスにはカシャッサ・アルテザナウ(自家製カシャッサ)のロック！というような、確固たる地位をカシャッサが確立してくれることを願ってやまないのであり、そのための試行錯誤をしながらの活動を今後地道にしていこうという方向性をもって、活動を開始したところである。

第一回『カシャッサを楽しむ会』

さて、大事な会の設立については、メンバーで会議を重ねに重ね、早い段階で法人化へ移行する検討を行ったが、各メンバーが働き盛りでそれぞれの仕事を多く抱えており、また、事務局あるいは本部に専属のスタッフを配属することが難しいため、とりあえずは任意団体として活動を継続し、イベントやセミナーなどで実績を重ね、会の存在やカシャッサに関する広報活動を地道に進めながら、その後について検討をするという方針で

滑り出した。かくして最初に行ったのは、日本ブラジル中央協会とのコラボイベントで好評を博した『カシャッサを楽しむ会』である。

『カシャッサ・カウンスル・ジャパン』としては初のイベントで、共催相手がいわゆる「協会」として確かな基盤と歴史を持つブラジル通の集まり「日本ブラジル中央協会」ということもあり、カウンスルとしての活動を知っていただくにはまたとない良い機会に恵まれた。それ故か、カウンスル側（というか私や一部のメンバー）には緊張が見え隠れした気がしたが、さすが、イベンターとして数々のイベントを経験し、乗り越えてきたメンバーや、すでにカシャッサについてのセミナーを経験している麻生氏との堂々たる進行もあって、大きな不手際などは皆無で、バックヤードで準備をしていた私などは初イベントにもかかわらずここまでやれるものか、と驚かされた。（もっとも開催までにいろいろとすったもんだはもちろんあったのですが）また、同時に、日本ではレアなカシャッサを飲み比べたり、参加者同士でわいわいやりながらカイピリーニャを楽しそうに作ったりする様子を見て、このようなカシャッサに関するイベントを開催することの手ごたえを感じた。ただ、当然だが読みが甘い部分もあった。

すでに本場のカイピリーニャを味わいつくした当協会会員には説明なくともお

分かりだと思うが、カイピリーニャはその飲みやすさの割にアルコール度数が高いのである。

この日初めてカシャッサをストレートで味わった方、あるいは久しぶりにカイピリーニャを飲まれた方はその美味しさのあまりか、短時間で多量のアルコールを摂取されたようで、イベント閉幕後に粗相が見受けられた。それは今後のイベントの反省として、また、カシャッサをストレートで楽しむ際の注意点として活かされるべき点であると感じた。まあそのくらい楽しく沢山飲めちゃうお酒であるという魅力も持ち合わせているのがカシャッサであり、カイピリーニャではないだろうか。

このカシャッサを楽しむ会で、お酒の勢いも手伝って普段あまり交流のない会員同士・参加者同士、とくに女性会員や女性参加者と楽しくお酒を飲みかわし、仲良くなられた男性会員がいらっしたら、是非ともカシャッサ・カウンスルの活動を応援していただきたい（笑）。

『カシャッサの日を祝う会』と 第二回『カシャッサを楽しむ会』

さて、カシャッサ・カウンスル・ジャパンはこのイベントの成功を皮切りに、その後ブラジル大使館にて『カシャッサの日を祝う会』（2017年9月13日開催）や第2回『カシャッサを楽しむ会』を開催し、ともに盛況のうちに終えるという実績を積み上げさせていただいた。

大使館での開催は、カシャッサを輸入する代理店の参加と、大使館による在日ブラジル人コミュニティへのイベント案内の発信も手伝って、日本ブラジル中央協会のネットワークとは異なる、より多くの方に、ストレートのカシャッサを試飲していただく機会に恵まれた。試飲用のカシャッサを提供していただいたおかげで、日本に入ってきている様々な種類のカシャッサの飲み比べテイastingが可能となった有意義なイベントであった。

第2回の『カシャッサを楽しむ会』は赤坂にあるブラジル料理レストラン「ブラジリカグリル」で開催させていただ

た。まだ記憶に新しい方もいれば、飲みすぎて記憶にない方もおられるかもしれないが、会場となったレストランでは、

支配人のご厚意もあってちょうど仕切られた空間を用意していただき、周りを気にすることなく談笑し、カシャッサを味わうことができた。また、カシャッサ醸造所が多く存在するミナス・ジェライス州の地方料理を特別に用意していただいたおかげで、カシャッサやカイピリーニャという飲料のみならず、食文化にもどっぷりとつかることができるイベントとなった。このくらい包括的にブラジルを紹介することができるイベントはなかなか開催が難しいと思うが、各関係者と参加者の方々の協力があってこそ成功したものであり、皆様にはこの場をお借りして改めて感謝申し上げたいところである。

また、試飲イベントとは違うアプローチとして、代々木公園で毎年行われるブラジルフスティバルにて、出店・販売されている各ブースのカイピリーニャのナンバーワンを決めるC1(シーワン)グランプリを昨年から開催した。今年は2回目となるグランプリも開催している。

このように地味ではありながら地道な活動は継続させていただいている。今後もこのような活動を継続しながらカシャッサの普及活動に力を入れていくと同時に、カシャッサを使ったコミュニケーションならぬ呑みニケーションを若い方々へも広げていけるようなカシャッサ活動＝「カシャ活」なども検討をしているところである。

活動はカシャッサ・カウンスルのHP(cachaca.jp)やFacebookページ、MegaBrasilサイトに掲載されているので是非ご覧いただきたい。もちろん会員や協賛していただける企業も募集しているのでHPなどからご連絡いただければありがたい。



なぜ「カシャッサ・カウンスル」としたか

さて、最後になぜこの会の名前が「カシャッサ・カウンスル」となっているのかについてご紹介したい。当初、メンバー会議でこの会の名前を考えたときに、一般的でオーソドックスな「協会」という名前を使用しなかったのだが、実はこのカシャッサを普及させようというアイディアが出たときに既に「カシャッサ協会」という名前の団体が発足しており、その活動を開始していたのである。そのため「協会」を使用することを避け、ブリティッシュカウンスルのような「カウンスル」というネーミングを使用することに至ったのである。しかし、カシャッサ協会のことは詳しくは存じ上げないが、少なくとも設立の経緯や背景などは異なれど、カシャッサを普及させたいという理念は一致するようなので、似たような団体が競うように同じことをするよりは、同じ方向を目指す者同士力を合わせればできないこともできるかもしれない、そう思うと私たちカシャッサ・カウンスルはこのカシャッサ協会とも歩みを共にするべきなのかもしれない、と個人的には思う時があるのである。

在日ブラジル人社会やブラジルの日系社会においても、日系子弟教育だったり社会支援だったり、その活動目的が似通った多くの団体が存在しているが、諸事情により、力を合わせるというよりは、お互いに微妙な距離を保って干渉しすぎないようにしているように見えるときがある。だが、このカシャッサ普及に関しては「お酒の力も手伝って」多くの方が明るく楽しく普及に力を入れることができる、模索する段階が近く来るのではないかと考えている。





●特集●ブラジルの酒革命

カシャッサとカイピリーニャをめぐる 三酔人歴史問答

『ブラジル特報』編集部

ヴィニシウス・デ・モラエスと パブロ・ネルーダ

詩人ヴィニシウス・デ・モラエス(1913-1980)が、当時ブラジル最大の週刊誌であった「クルゼイロ」誌から「自己紹介の詩」の寄稿を依頼されたのが1956年、43歳の時だ。記者を前にして自らの半生を語る詩『わが自画像』を、手元のノート用紙に一気に呵成に書き上げたのだった。その、96行もの長詩の“核心部分”を引用すると、

「一番好きなもの：

オンナ、オンナ、オンナ、
(特に僕の奥さんが一番)、
僕の子供たち、アミーゴたち。
家事については、結構手伝っている、
そう、僕は名コックなのだから。
(中略)

飲むのが大好きで、
よく飲む(10年前に比べれば
少なくなっているけれど)。
僕の好きな酒は、ウイスキー
水は少なめ、氷は多めに。
ダンスも好きだ。
そんなこんなで
人は、僕をボヘミアンと呼ぶ。(後略)」

生涯で9回も結婚(&離婚)したヴィニシウスは、まさに、食欲も性欲も知識欲もすべて全開にして生き抜いた“ブラジル人(男性)が憧れる”人生の達人であったが、そんな彼が「チリの国民詩人」パブロ・ネルーダ(1904-1973)

とパリで知合ったのは、『わが自画像』を書いた翌年1957年であった。

当時44歳の外交官詩人が、チリを代表する53歳の詩人と出会い、たちまち意気投合し、その時から親友となる。ヴィニシウスがチリにいく時は、イスラ・ネグラのネルーダ宅や別荘に泊まり、チリの詩人がリオに来る時はヴィニシウス宅で過ごす、という関係が10数年にわたって続いたのだ。

平和な時期の二人に共通していたことは、グルメ、酒好き、女好き、そして文学談義だ。“ノミネーション”を熱愛したお二人を巡る、抱腹絶倒のエピソードはいくつも語られているが、例えば、二人がリオの海岸で過ごした時。「おっぱいとお尻だらけのコパカバーナで、陽光を浴びて汗をかきながら、海産物を食べた。もちろんパチーダや生ビールを飲みながら。」とヴィニシウスは記しているが、大食漢のネルーダは、オリーブ油で炒めたエビを山ほど食べて満足しつつも、その時の白ワインは「チリ・ワインを持ってきてくれ、フランス・ワインなんかよりずっといいからね」と念を押したとか。

「ベロオリゾンチへの食道楽の旅」というヴィニシウスの詩を読むと、まあいろいろなものを二人で食べまくっているのがわかる。ネルーダが一度も食べたことがないということ、カピヴァーラ、タツ（アルマジロ）、パッカ（豚鼠）、シカといったジビエ料理をいくつも胃袋に収めてから、フェイスン（インゲン豆）と豚脂がベースのミナス料理に移行、激辛のピメンタ（俗名「地獄の火」）を

ふりかけ過ぎて、ひりひりした舌をカイピリーニャで冷しながら、汗まみれでお皿と格闘しているネルーダ。そんな有名詩人を茶目っ気

たっぷりのヴィニシウスが冷やかしている、そんな光景がみえてくる。

だが平和な日々は長くは続かない。1970年の大統領選挙で当選したアジェンデによってネルーダは駐仏チリ大使に任命され、そのパリ在任中の1971年、ノーベル文学賞を受賞し国際的にも認知されることになったが、72年病魔(ガン)に冒され、翌73年の軍事クーデターから12日後の9月23日、急逝する。

ヴィニシウスが、「早すぎる死を迎えた、わが兄弟パブロ・ネルーダに捧ぐ」との献辞を掲げた詩集“Historia Natural de Pablo Neruda”(パブロ・ネルーダ博物誌)をバイアのマクナイマ出版社から上梓したのが、翌1974年。バイアの画家カラザンス・ネトーが表紙を担当した初版の印刷数はわずか300部と、実質的な私家版にしたのは、当時の軍事政権の検閲・言論弾圧を見越したからだ。この完全復刻版がCia.das Letras(文芸出版社)から商業出版されたのは、33年後の2007年のことであった。

上述のエピソードは、同書から読み取ったものだが、ヴィニシウスはウイスキーに限定せず、カイピリーニャもパチーダも愛飲していたことは明白である。

ジルベルト・フレイレのピタンガ酒 とジョン・ドス・パソス

大著『大邸宅と奴隷小屋』(初版1933年)によってブラジル社会論を革新した社会人類学者ジルベルト・フレイレ(1900-1987)のレシーフェ市北部にある邸宅は現在記念博物館になっているが、フレイレ宅を訪れた者が皆“強要”されて“痛飲”させられることになったのが、フレイレ手作りのピタンガ酒だった。この大邸宅を訪ねた有名人は数多く、作家A・ハックスレー、歴史家ではトインビー、リュシアン・フェーヴル、政治家ではロバート・ケネディ、映画監督ロッセリーニから始まって、内外の有名人がレシーフェにやって来てはフレイレとの知的歓談を楽しんだのだ。

この果実酒を試飲して即気に入って、なんとボトル一本空けてしまったのが米国の作家ジョン・ドス・パソス(1896-1970)だった。



◀ Gilberto Freyre & Licor de Pitanga

世界を見据えていた“偉大な田舎者”であって、古典語(ギリシャ語・ラテン語)はもとより、英語、フランス語、イタリア語などにも堪能であったから、史料の読み込みは半端ではなかった。

そんなカスクードが「小鳥が飲まない水」について論じたのが、

彼のブラジル紀行“Brazil on the move”(1963年)のなかに、朝から夕方まで滞在したフレイレ宅からホテルに戻って、翌朝砂浜を散策していたら、たちまち「サウダージ」を感じてしまったと記しているから、本当に「イイ酒」だったようだ(ハーバード卒のドス・パソスはポルトガル系三世なのでポルトガル語やスペイン語も堪能だった)。

この果実酒の原料は、友人のサトウキビ農園主から入手した特級カベッサ(蒸留装置から一番最初に出てくるカシャッサ原液)と自家庭園で収穫した完熟ピタンガ果実であるが、最低10年間は熟成させたものとかで、この“製造ノウハウ”はフレイレ家の秘伝なのだ、と思わせぶりの記述になっている。

カマラ・カスクードの カシャッサ讃歌

民俗学者カマラ・カスクード(1898-1986)の著書群はブラジル文化に関心を有する者の知的好奇心を徹底的にくすぐるものばかりだ。多作な学者なので、ある研究書によれば、その著作数は小冊子を含め144ある由だが、代表的なものだけを列記しても、『ツビー語

魚名』、『ヴァッケイロとカンタドール』、『モンテニユとブラジルのインディオ』、『ブラジルの伝説集』、『ブラジル民話の地理学』、『口承文学』、『ブラジル民俗研究事典』、『ジャンガーダ』、『ハンモック』、『ダンテとブラジルの大衆的伝統』、『モーロ人、フランス人とコダヤ人』、『文明と文化』、『庶民の宗教』、『ブラジルにおける食文化の歴史』、というように民俗学、社会学、歴史学、文学といった境界を自由に飛び越えた作品群を残している。もちろん、本業(リオグランデ・ド・ノルチ連邦大学法学部教授)の国際法に関する論文もあるし、法学を修める前に医学を3年間学んだ人だけに、理科系の文献も自在に読み込んでいる。まさに博覧強記の異才だ。

サンパウロ大学やパリ大学から教授招聘の話が来ても、「故郷ナタールを離れたくない」からと固辞したカスクードは、自らを“provinciano incuravel”(救いがたい田舎っぺ)と称していたが、ノルデスチの一角から

『カシャッサ前奏曲』(初版1968年)だが、第1章Abrideira(食前酒)でベイツの名著『アマゾン河の博物学者』からの巧みな引用で始まり、最終の第17章Saideiraで、「友よ、以上をもってサイデイラ(最後の一献)とします」と粋(酔)人らしく締めている。文献上は16世紀に初出するカシャッサは恐らく15世紀に創生された。カニーニャ、アグアルデンチ、メラードなどとも称され、世界最大の奴隷輸入国であったブラジルへの奴隷貿易では、タバコと共にカシャッサは奴隷を購入する時の交換通貨の役目を果たし、さらには、反乱を事前に鎮静するためにも船内の黒人たちを適度に酔っ払い状態にすべく強制的にカシャッサを飲ませたりもした。また、先駆的独立運動であった1817年の「ペルナンブーコ革命」では、ポルトガル植民地主義(＝ワイン&小麦)に対抗するナショナリズムの象徴としてカシャッサが意味付けられた、といった史実を復習しつつ、「ブラジル人はカシャッサを愛してやまないが、決してカシャッサ酔漢ではない」ことに留意しよう、と述べているカスクード教授の語り口調に読者は引き込まれてしまう。

カイピリーニャ発祥の地は サンパウロ州内陸部

カスクード教授の素敵なカシャッサ論の唯一の欠陥が、(ライム+カシャッサ+砂糖+アイス)のカクテル、カイピリーニャへの言及がないことだ。

①ドライマティーニ、②マンハッタンに次いで世界で三番目に消費されるカクテルがカイピリーニャといわれているが、この辺については、食文化研究家J・A・ディアス・ロベス(1943～)の解説に沿って概観してみよう。
1)カイピリーニャは、いつ、どこで生まれたか？

時期は20世紀前半、場所は、リオでもノルデスチでもなく、サンパウロ州内陸部、だ。風邪をひいた時薬の代わりで飲まれたパチーダ・デ・リマウン(ライム+ハチミツ+カシャッサ)のハチミツが砂糖に代替されてカイピリーニャへ。

2)州都サンパウロ市の住民(男性陣)に受容されるようになったのは1950年代

都市中産階層が飲むお酒は、1950年代まではビールとウイスキー(スコッチ)が主で、輸入ワインは金持向け、カシャッサは貧乏人向け、と色分けされていた。日本人移民の場合も同様で、社会上昇に従って、大衆酒カシャッサから高級酒スコッチへと“切替”。

3)カイピーラ⇒カイピリーニャ
サンパウロ州内陸部から中西部(ミナス〜ゴイアス)に住む無学の農夫たちはカイピーラ(田舎者)と呼ばれていたため、このライムとカシャッサをベースとするカクテルも、縮小辞カイピリーニャと呼ばれるようになった。(恐らく、1950年代)

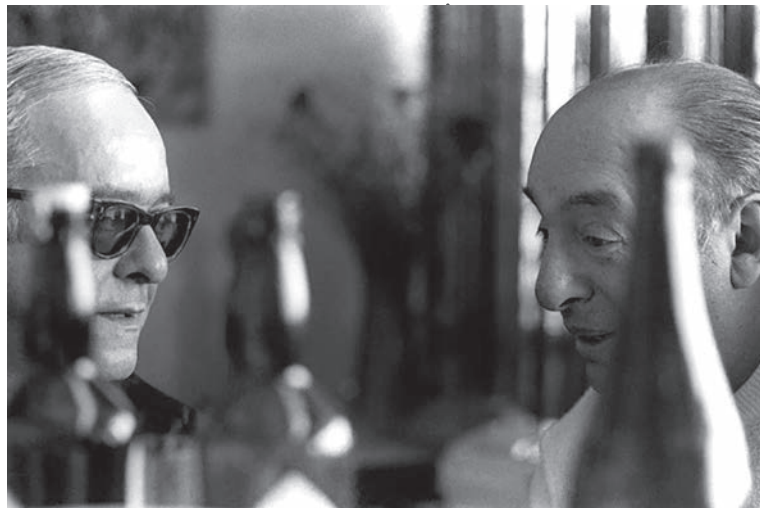
4)サントス・ビーチから全国へ
カイピリーニャが“bebida de praia”(ビーチで飲むお酒)として最初にブレイクしたのが、サントス海岸だった。1950年代以降、サントスから全国のビーチへ伝播されていく。

5)ホテルのバーに登場
ホテルのバーでカイピリーニャが供されるようになったのは、サンパウロのHotel Ca'd'Oroが最初で、1957年のこと。小さく割った氷(当時はアイスは貴重品)を加えるようになったのも、このホテルから。カイピリーニャ用の、やや大きめのコップ(グラス)が定番化したのも1960年前後だ。

6)カイピリーニャの進化型
ラム⇒caipirissima
ウオッカ⇒caipirosca
日本酒⇒saquerinha
こうした“進化型カクテル”が、ブラジルで広まるのは1980年代以降だが、一時期安酒と決めつけられていたカシャッサを1950年代以降社会上昇させたのはカイピリーニャの“功績”と断言してよいだろう。



▲ Camara Cascudo



◀ Vinicius de Moraes & Pablo Neruda (Foto: Pedro de Moraes)

将棋の未来とブラジル



石川達也
(ブラジル将棋連盟理事
ニッケイ新聞記者)

日本の国民的ボードゲーム『将棋』。最近国内では殊に注目を集めているが、海外でもアニメや漫画の影響から興味を持つ人が増えている。ブラジル（伯国）も例外ではない。今回は日本固有の伝統文化『将棋』が如何にして生まれ、伯国に渡り根を張ったのか。そして、伯国の持つ将棋文化に対する可能性を紹介したい。

古代インドから日本へ

将棋の起源は紀元前3世紀に古代インドで生まれた『チャトランガ』という戦争をモチーフにした4人制のサイコロ遊戯にある。『チャトランガ』は交易を通じて東西に伝播し、西洋で『チェス』に、日本で『将棋』となった。日本へは平安時代に伝来し、後に江戸幕府に公認され、庶民の文化として根付いた。

そしてブラジルへ

1908年に日伯間で移民協定が結ばれると、移民達は将棋道具を行李に詰めた。移民船での渡航には約2カ月を要し、移住後の開拓生活は厳しくも長閑な日々が続く。移民らは船上で遊び、到着後はピンガ片手に勝負を楽しんだ。切り倒した原始林を利用して将棋道具も自作した。移住地ごとに将棋倶楽部が作られ、伯国に将棋文化の基礎が作られた。

1948年には『勝ち負け抗争』の混乱収まらぬ日系社会で、将棋愛好家らは社会的結束の範を示すため、伯国初の全国将棋大会を企画する。邦字紙パウリスタ新聞が協力し、地方に乱立していた将棋倶楽部を糾合。後の伯国将棋連盟の土台を築いた。大会は全伯名人戦として現在も続いている。

伯国将棋連盟の会員数は1970年代に1500人を超え、ピークを迎える。全伯大会を開けば、300人以上が参加し、3日3晩かけて優勝を競った。しかし、1973年に移民政策が終了すると、日本人会員の新規入会もストップ。2000年頃には日本人会員の高齢を理由とする退会が続き会員数は50人ほどに減少した。

将棋の今と課題

インターネットが普及し、将棋は世界中で楽しむことが出来るよ

うになった。しかし、日本から外国への情報発信も、外国から日本への情報発信も現状乏しいため、外国人競技者が増えた感はありません。

日本は超高齢社会であり、今後の人口減少は避けられない。競技者のほとんどが日本人である将棋は、人口減少と共にその文化規模を縮小させかねない。それを回避するためには海外への普及が必須だ。伯国は日本への親しみが強い国であり、その嚆矢となりうるのではないだろうか。

将棋の未来とブラジル

伯国将棋連盟副会長のジェームス・M・トレドさんは、チェスの国際マスター(IM)の称号を持つ実力者。日系人女性と結婚し、息子が母方の祖父から将棋を習ったのを機に自身も覚えた。将棋には駒の再使用ルールがあり、チェスと違って手詰まりからの引き分けが起き難い。この点に対するジェームスさんの評価は高く「将棋はチェスと似ているが、より複雑だ。伯国はチェスが盛んな地。受け入れられる可能性は十分ある」という。

4月にサンパウロ市リベルダーデ区にある伯国将棋連盟会館で初心者教室を行ったところ、60人が参加した。一時帰国した際に、将棋の海外普及に励む外国人初女流棋士のカロリーナ・ステチェンスカさんに会い、事の次第を伝えると「私の国（ポーランド）では10人集まれば良い方」と参加者の多さに驚いていた。

伯国の特性を活かせば、将棋文化の普及のみならず、カロリーナさんの様な才能ある人材を見出し、育て、プロ棋士として輩出することも出来るのではないだろうか。

伯国での将棋文化普及の中心

将棋文化普及の中心となっている伯国将棋連盟会館は、リベルダーデ駅から徒歩2分、毎日午後1時から6時まで開館しており、終日10リアルで指し放題。雰囲気は、田舎の将棋道場といったもの。日系社会然とし過ぎているために、普段関わりの無い日本人は入りづらいようだが、最近は藤井聡太七段の活躍により、子供の習い事として将棋を求める家庭が増え、問い合わせが増えた。日本人向けにも初心者教室を開催し、交流を深めたい。行く行くは日伯交流戦を開催し、日伯文化交流の一端を担うことができればと思う。

普及応援者募集中

駐伯国日本国大使である山田彰氏が日本のNPO団体『世界に将棋を広める会』の理事であることをご存知だろうか。山田大使は過去の赴任先でも普及活動を行い、現在も忙しい公務の合間を縫って、普及活動に協力してくれている。

伯国将棋連盟では大会や教室の開催に協力してくれる普及協力員を募集中だ。伯国将棋連盟の活動状況はFaceBookから知ることが出来る。活動に興味のある人は、伯国将棋連盟の石川までぜひ連絡を。

伯国将棋連盟：住所＝Rua Galvao Bueno, 17, 3o. andar - Liberdade、電話番号(11)3209-7687、FaceBookアカウント＝Associação Brasileira de Shôgi。

◀伯国人への将棋教室の様子

▼日本将棋連盟から伯国将棋連盟へ寄贈：移民110周年記念の手彫り駒



商船三井ブラジル事業 移民の歴史と共に



大胡俊武
(株商船三井南米総代表)

今年はブラジル日本移民110周年の記念すべき年。当社とブラジルの関係もその移民の歴史とほぼ時を同じく始まった。周知の通り第一回移民船の笠戸丸がサントス港に入港したのが1908年6月18日。その4年後の1912年に当社の前身である大阪商船が海軍省から笠戸丸を購入して1916年12月に日本と南米東岸を結ぶ定期航路を開設した。当初は3隻による年間7航海の移住者輸送から始まり、その後着々と船隊を強化し当時の造船技術の粋を集めた初代ぶらじる丸を投入するなど戦前の最盛期には年間24航海を行い、1920年にサントス、1935年にサンパウロ、1941年にはリオデジャネイロに駐在員事務所を開設したとの記録が残っている。その後戦火の高まりを受けて1941年に航路を休止、船舶は戦時徴用されその殆どを失うという苦難の後、1952年には新造船さんとす丸を投入し南米航路を再開。その後も二代目『ぶらじる丸』を始め当時の最先端の新造船を投入し続け、1973年まで通算50年余りに亘り約18万人の方々の移民輸送に携わった。

定期航路の変遷

時代の流れと共に当社の南米定期航路の運航は移民船、貨客船、在来貨物船と姿を変え、1990年代にコンテナ輸送に進展し、商船三井としてはアジア・南米東岸トレードを中心に業界最速のウィークリーサービスを展開し続けた。コンテナ輸送事業では世界的な競争激化の中を勝ち抜いていく為に商船三井・日本郵船・川崎汽船の邦船三社によりコンテナ船事業を統合し、新会社 Ocean Network Express（通称 ONE）を立ち上げ本年4月からサービスを開始し、新時代に突入した。新会社ではサービス網が更に拡充され、また商船三井ブラジルからも新会社に多くの人員が移籍、当社が長年培った良き DNA が継承されつつ新会社がブラジルに於いても大きな成功を収めることが期待されている。

完成車輸送

現在活発な動きを見せているのが自動車専用船による完成車輸送分野である。ブラジルからの完成車輸出は2014年を境に上昇に転じ、2017年は過去最高の76.2万台を記録、本年度も勢いは継続している。当社では、2016年にブラジル及びアルゼンチンからマゼ

ラン海峡を通過してチリ・ペルーを始めとする南米西岸・中米向けの輸出完成車を輸送する新サービスを開設した。安定したスケジュールときめ細かいサービスに好評を頂いている。今後も顧客ニーズを敏感にキャッチし、サービス頻度の拡大、寄港地の追加等を積極的に検討し、サービス品質の更なる向上に努める所存である。

ドライバルク輸送

ブラジル日本移民100周年を記念した2008年とほぼ時を合わせ、2007年に三代目『BRASIL MARU』が竣工した。同船は日本船社として初めて進出した載貨重量323,000トンの超大型鉄鉱石専用船である。商船三井は、30万トン級の超大型船7隻を含め、大型ドライバルク船を約90隻運航しており、増大するブラジル積み鉄鉱石の輸送ニーズに素早く対応できる体制を整えている。それ以外のバルク貨物、即ち穀物、木材チップ等にはバナマックスからスモールハンディまで様々な船を用意。現在ブラジルに寄港する当社ドライバルク船は年間約100航海、この数を更に拡大すべく活動中である。

海洋事業

今後当社がブラジルでの営業活動を強化する最重要領域の一つが海洋事業だ。商船三井としてはパートナーと共同でプレソルト含む有望な深海鉱区での石油採掘を行う浮体式石油ガス生産貯蔵積出設備（FPSO）に2010年より参画、ベトロプラスへの長期用船契約の下で石油生産に携わっている。ブラジルにて当社の参画するFPSOは現在操業中のものが4船、本年新たに1船が稼働開始予定、更に2件の新規プロジェクトが現在進行中である。これ以外にも、同様にパートナーと共同でシャトルタンカー、海底設備の設置・保守等に従事するサブシー支援船への参画も開始。また、今後可能性が見込まれる浮体式LNG貯蔵再ガス化設備FSRUの新規プロジェクトへの参加も推進している。

ロジスティクス事業

グループ会社である商船三井ロジスティクスはブラジルにて2008年より営業を開始。コンテナ船事業がONEの看板にて行われることになった後、商船三井として製品輸送サービスの選択肢を提供できる様、この分野を強化することが今後の目標である。

新時代へ

ブラジルを取り巻く国際環境も刻々と変化し、海運業者としてもより付加価値を付けたサービスを提供することが求められている。当社が長年のブラジルでの事業活動での経験から学んだものを生かしながらこれらの変化に機敏に対応し、より安全かつコスト競争力のあるサービスを提供することでブラジル経済の更なる発展の一助となれるよう努力を続けていく。



鉄石運搬船▶
(場所はTubarão港)



◀自動車運搬船

社会負担金 (PIS/COFINS)の課税標準額の決定



ルシオ・バストス / 吉田幸司 (KPMG サンパウロ事務所パートナー) 菊元 崇 (カンピーナス事務所 マネージャー)

今回は、2017年3月に連邦最高裁判所のPIS/COFINSの課税標準の判決について説明したい。この連邦最高裁判所の判決が出された後もなお、納税者の間では、保守的な解釈、積極的な解釈に基づいて対応が異なっているのが現状であり、なかなかブラジル税制の複雑さを感じるところである。

納税者にとって複雑で頭の痛い税務問題の1つにPIS/COFINSの税額計算のための課税標準額が一体何なのかというがある。PIS/COFINSの課税標準額は、“総売上高”とされている。過去数十年の間、法廷で様々な議論がなされ、連邦地方裁判所によって相反するような判決もなされたが、2005年に連邦最高裁判所の特別控訴第390.840号により、「総売上高の概念は、税金または会計の分類に関係なく、すべての得られた収入と同等であるという法律第9718/98号第1条第3項は違憲である。」との判断がなされた。

しかし、上記の決定後も、依然としてPIS/COFINSの課税標準額となる総売上高の概念に、請求書に記載される商品流通税(ICMS)が含まれるか否かについては、納税者の間に疑問が生じていた。

17年3月に連邦最高裁が納税者に有利な判決

様々な議論を経て、2017年3月に、連邦最高裁判所は、特別控訴第574.706号により、「請求書に記載されるICMSの金額は、企業の総売上高を構成するものではなくPIS/COFINSの課税標準額には含めない」という判決がなされ、納税者にとって有利な判決となった。しかし、この判決後も、ブラジル連邦歳入庁が納税者に対しICMSを課税標準額に含めて計算されるPIS/COFINSの支払要求を継続しているケースもあると言われている。

このような状況であることから、連邦最高裁判所の判決に基づいてPIS/COFINSの課税標準額からICMSを除く企業や、引続きPIS/COFINSの課税標準額にICMSを含めて計算する企業があるなど、対応が分かれているのが現状である。また、ICMSをPIS/COFINSの課税標準額から除くことについてより確実とするために、当該判断に対して法的合意性を求めて裁判を起こしているケースもあり、その裁判件数は10,000件を超えとも言われている。

また、実務上の課題としてPIS/COFINSの課税標準額を変更する場合にはシステム変更を伴うケースが多く、実務上の対応するために労力を要するところとなっている。この判決に従う場合、税金の支払額を抑えることができ、企業の

キャッシュ・フローに直接的な利益をもたらすと言える。つまり、ICMSを含んだ総売上高を課税標準額として計算したPIS/COFINSを支払う必要はなく、また、少なくとも過去5年間に過大に徴収された金額の還付を受けることも可能な場合もある。

還付には各種書類を税務当局に提出する必要

なお、還付については、次のような書類を税務当局に提出することによって可能となる。例) ICMS申告履歴、ICMSに関する評価文書(GIAS)、電子帳簿システム(SPED)、連邦税申告書(DCTFS)並びに定款や登記などの会社の組織文書など。これらの資料に基づいて過払いとなっているPIS/COFINSを計算し、その上でインフレーション調整を考慮してPIS/COFINSクレジット(還付対象額及び他の連邦税に対して相殺できる金額)を算定することとなる。

当該議論に関連し、上級司法裁判所がPIS/COFINSクレジット金額計算のための基礎となるインプット(支払PIS/COFINSの対象となる原材料など)の概念について、繰り返し判決が出されている。このインプットとは、1) 企業活動に関連し、必要不可欠な財とサービスであり、2) それは、納税者の地位を安定させるものであり、3) 収益を生み出すために必要不可欠なものとされており、このインプットに該当する場合のみPIS/COFINSクレジットが認められるものとされている。

そのため、実務的には、クレジットを回収するためには法的確実性、インプットが企業の活動に必要な不可欠かつ適切であるかを考慮する詳細な分析等が必要となるが、当該連邦最高裁判所の判決は納税者に対し有利であり、クレジットを回収しようとする動きの拡大につながると考えられる。

減額された税金は企業の投資拡大につながる

当該判決によりブラジル政府は数十億リアルにも及ぶ税金を失う結果となるが、一方で今までこのような税金を支払っていた多くの企業はこの減額された税金を新規投資や新規雇用の創出に充てるといったことも可能であり、多くの利益を享受することができるようになる。最後に繰り返しであるが、上述の通りにこの最高裁判所の判決を受けてもなお、その判断が企業によって異なるというのは、ブラジル税制を理解するにあたって更に難解なものとするところであろう。

ブラジルの販売代理店契約に関する法律

自社製品の販売拡大に販売代理店の利用は不可欠であろう。特にブラジルは国土が広く、地域によって商慣習が異なることもあるため、地域に密着した販売代理店を利用することで、販売チャネルの確保や顧客対応がスムーズになる。ブラジルでは、日本と異なり、販売代理店契約に関する特別の法律が存在する。そこで、本稿では、販売代理店契約を締結するにあたり留意すべきポイントについて解説する。

1. 販売代理店契約の形態

「販売代理」には、エージェントと呼ばれる形態とディストリビューターと呼ばれる2種類の形態が存在する。エージェントは、製品販売の仲介のみを行い、成約した場合のコミッションを受け取る形態である。ディストリビューターは、販売代理店が自己のリスクで製品をメーカーから買い取り、それを顧客に再販売して、購入価格と再販売価格の差額を取得する形態である。日本では、法的な観点でこの両者を区別する意味はそれほどないが、ブラジルでは、形態によって適用される法律が異なる。

2. 適用される法律

販売代理に適用される法律は、以下のとおり、形態及び取扱製品により異なる。なお、下記の2つの特別法と民法の関係は明確ではないため、実務的には、特別法が適用される場合でも、民法(2002年10406号)の条文も念頭に置いて対処している。

形態 / 扱い製品	適用される法律
エージェント	1965年法 4886号、民法
ディストリビューター(自動車以外)	民法
ディストリビューター(自動車)	1979年法 6729号、民法

3. 独占権・独占義務

エージェントであってもディストリビューターであっても、製品の販売に関して独占権を付与するか、また、独占義務を課すかは重要な点である。いずれも交渉によって決定する事項であるが、独占の有無を決定した場合は必ず契約書に規定すべきである。仮に契約書に規定がない場合は、法律に従い処理される。

民法	法 4886 号	法 6729 号
契約書に定めのない限り、同じ業務・同じ地域において複数の代理人を使用してはならない。代理人側も、契約書に定めのない限り、委託者の業務と同様の業務を他者のために扱ってはならない。	契約書に記載がない限り、独占権は付与されない。	規定なし。なお、複数のディーラーがいる場合、ディーラー間の最低距離を定める。



柏 健吾 (TMI 総合法律事務所 日本法弁護士、現在ブラジルで勤務)

連載
ビジネス
法務の肝

4. 契約期間

以下のとおり、特別法には契約期間についての特別の定めがあるため、特別法が適用される場合には、契約期間の取扱いには留意が必要である。なお、契約期間の定めの有無によって、契約の解除方法及び契約解除時の補償金の計算方法が異なる。

民法	法 4886 号	法 6729 号
規定なし	以下の場合、期間の定めのない契約となる。 ①期間の定めのある契約が更新された場合 ②ある契約を当該契約の終了から6か月以内に別の契約で引き継いだ場合 ③契約書に契約期間の定めのない場合	1回目の契約期間のみ期間限定可能(ただし、5年以上)。更新した場合、契約期間の定めのない契約となる。

5. 契約の解除

以下のとおり、各法律に契約解除について定めがある。民法と法4886号で、契約期間の定めのない契約の解除に関して、事前予告期間が30日と90日と違いがある。上述のとおり、民法と特別法の関係が不明確であるため、将来的に争われるリスクを回避するためには90日の事前予告期間を設ける方が安全である。

民法	法 4886 号	法 6729 号
契約期間の定めのない契約の場合、90日前の通知が必要。ただし、他方の当事者が当該契約のために投資を行っているのであれば、契約の性質を考慮して、当該投資を回収するために十分な期間が経過している場合のみ解除可能。	契約期間の定めのない契約又は6か月以上経過した契約を正当な事由なく解除する場合、30日前の通知又は解除日から遡って3か月間に受領したコミッションの3分の1を支払うことで解除可能。	契約期間の定めのある契約を更新しない場合、180日前に通知する必要がある。180日前までに通知しないと契約期間は無期限になる。

6. 解除時の補償

以下のとおり、特別法には解除時の補償についての特別の定めがある。

民法	法 4886 号	法 6729 号
特別の条項なし(損害賠償請求となる)	契約期間の定めのない契約の解除の場合、代理人に対する補償金額は契約期間中に支払った全コミッションの12分の1を下回ってはならない。契約期間の定めのある契約の解除の場合、「契約の残期間×契約期間中の平均コミッション額×2分の1」の補償金を支払う。	契約期間の定めのある契約を更新しない場合、ディーラーに販売した自動車・純正部品を買取時のディーラーへの販売価格で買い戻す。契約期間の定めのない契約を解除した場合、ディーラーに販売した自動車・純正部品を買取時の最終消費者への販売価格で買い戻す。また、「(12か月+3か月/5年)×想定売上上の4%」を支払う。

ブラジル文学を楽しむために

武田千香
(東京外国語大学教授)



ブラジルの文学には、日本の読者をわかりにくくさせている「なにか」がある。これは、これまでブラジルの文学作品の翻訳刊行に携わってきた中で、感じていることである。ネットの感想等を見ると「不思議」という言葉が、少なからず見受けられる。読後に残るもやもや感、混沌として物語や人物をつかみきれないもどかしさ、そんなとまどいを覚える人が少なくないようだ。

ブラジルの文学は、異なる二つのものの間を彷徨う物語が珍しくない。邦訳のある作品を例にとれば、その最たる例がシコ・ブアルキの『ブダペスト』だ。リオとブダペストでそれぞれ異なる名前、女性、職業、言語、文化を持ちながら二重生活を送るゴーストライターの話だが、妄想と現実が混じり合う中で、多くの対比が境界を越えて流れ漂い、しまいにはどれがどれで、何が何で、だれがだれなのかわからなくなる。

ブラジルの人や文化には、多少乱暴な言い方かもしれないが、日本の文化や社会では忘れられがちな異境地がある(と、私は理解している)。彼らは日常的に現実社会を逸脱し、原初的な人間としても生きる選択肢を持っており、それが文学でさまざまな形で表われる。現実と夢や妄想が渾然一体となるのもその例だ。

ルトン・ハトゥンの『エルドラードの孤児』*も、現実と神話的世界が交錯している。舞台は20世紀前半のアマゾンの中流地域で、文明化されているとはいえ、人々はまだ神話が色濃く残る世界に生きている。主人公アルミントは、急死した父親の事業を継ぐが、労働や経済といった現実社会の論理に意識は向かず、一夜をともしたきり姿を消したインディオの女を忘れられずに川底の魔法の町に思いを馳せる。アマゾンに擁するブラジルでは、文明と未開の葛藤はいまもアクチュアルなテーマだ。神話的世界は神や聖人が住む宗教的空間でもある。ブラジルの人はミスティックで、霊や奇跡に重きを置く宗教を信仰する人は現代でも多く、神話や迷信は日常的に存在感を放っている。文明と未開の交錯は、近刊のベルナルド・カルヴァーリオの『九夜』*でも扱われる。

揺らぎはまた社会を作りあげる制度や法(秩序)と、ありのままの人間としての生きるライフ・スタイル(脱・秩序)の間にも起こる。ズウミーラ・ヒベイロ・タヴァーリスの『家宝』*は、その二面性をみごとに描いている。法を司る判事である夫には、妻マリアとの正式な結婚生活の

ほかに、秘書兼理学療法士とのホモセクシュアルな愛人との暮らしがある。清純で初心なマリアは夫から、〈秩序〉を装いつつもそこから逸脱する生き方を教えられ、自らも人間的生を謳歌する。社会の擬装性と制度や法の人工性が、夫からプレゼントされた婚約指輪のビジョン・ブラッドの真贋に重ね合わされる。

ジョルジ・アマードの『キンカス・ベロー・ダグアの二度の死』*は、実直な公務員にして模範的な夫かつ父親であった主人公が、退職後、家族を捨てて落伍者的な生活に身を投じ、第二の人生を自由奔放に生きた話。つまり結婚、家族、労働という近代の制度(秩序)を見限り、「解脱」したわけだ。彼には二度死んだという説が流布する。死亡診断書が証明する死と遊び仲間と迎えた死。どちらが本当の死なのか。

このように二極の間で揺れるのはブラジルの文学によくあるパターンだ。だから結末が曖昧になる。時代を遡れば、妻の不義の有無の判断を読者に委ねるマシャードジアシスの『ドン・カズムッホ』もそうだが、『家宝』、『老練なる船乗りたち』(アマード)*、『エルドラードの孤児』、『第三の川岸』(ローザ)*も、それを考えるのは読者だ。日本の文化や社会は、基本的に秩序を前提に成り立ち、発想もたいがいそれに基づく。社会共通の一元的な基準があり、常にそれを遵守し、黒か白か一つの答えを出すことが求められる。〈秩序〉とともに〈脱・秩序〉の発想も排除しないブラジルでは、物事を絶対化せず相対的な視点で見る傾向が強い。だから違いや多様性に関しても寛容なのだ。

だが〈脱・秩序〉の境地は両刃の剣である。制度や法律を度外視した発想がゆるされると罪の意識が緩くなり、人間の欲望はむき出しになる。それが暴力として現れたとき、治安の悪さと心の温かさは同じコインの裏と表となる。近刊、フォーベン・フォンセッカの『あけましておめでとう』*には、この負の側面が如実に描かれている。

擬装性、相対性、ユーモア、文明と未開の混在、神話的世界、原点としての人間、官能性……。さまざまな形で現われるブラジル文学のリズムに揺られて、人間を満喫する生の愉しみを味わいたい。考えてみれば、その自然的被造物としての人間の境地こそ、いまの日本の人々が見失ってしまっているものなのだから。

(*は「ブラジル現代文学コレクション」(水声社)で既刊または近刊予定の作品)



普段の食事で味わうサンパウロの文化・歴史

水谷俊江
(管理栄養士・元ブラジル在住4年)

夫のサンパウロ赴任に家族帯同と決めた時、「サンパウロでは野菜は食べられるのかしら？」閃光のように不安がよぎった。

漠然とした不安を抱えながら、サンパウロに到着した翌日。その日から夫は会社、当時高校生だった娘はスクールバスに乗ってインターへ。一人取り残されても、不安でもお腹は減る。とりあえずどこかでお昼を食べなきゃと右も左もわからないサンパウロの町へ。大きな道沿いに「TEMAKERIA」を発見。お店の名前が日本語の手まき寿司だからか安心感はあった。メニューの一番初めに書いてある人気メニューと思しきものを指さしオーダー。そしてやってきたお料理が…パーティーの時に使う、紐を引っ張ると「パーン」と景気よく紙吹雪が舞うクラッカーのような手まき寿司??? イチゴやマンゴー、葉っぱに見立てたきゅうりの手まき花束に思わず心が跳ねた。一人で外食の心細さ一転、面白いもの、美味しいもの探しのブラジル生活へと「パーン」と切り替わった瞬間となった。

東京は世界各国の料理が集まっているといわれるが、サン

パウロほど身近に世界中のレストラン巡りができる都市はないと思っている。

サンパウロで世界の料理を楽しむことができるのは、ブラジルが移民の国だから。それは世界の各国から様々な理由を抱えてたどり着いた移民たちが故郷を懐かしみ、工夫しながら味を伝え続けてきたからということ。それを私が知ったのはサンパウロで暮らすようになってしばらくしてからだ。

また、サンパウロは野菜が豊富である。毎週開かれるフェイラ(朝市)の野菜たちも色鮮やかで一つ一つが大きくて見事。野菜の多くは日系人が作っているそうだ。ブラジルの条件の悪い赤土で長い年月をかけて研究開発したものの。もともとブラジル人は野菜を食べる習慣がなかったところに日本人が沢山野菜を食べる習慣をもたらしたということだ。

サンパウロの熱い太陽を浴び育った野菜で、栄養のバランスを崩すこともなく毎日の食事をいただくことができた幸せ。団扇のようなコーベ(ケール)が束になって売っていた緑色の風景を懐かしく思い出す。普段の食事がその土地での歴史や気候風土がうつしだされているのだと深く感じている。

ジャーナリストの旅路

変わる南米と変わらぬ南米

本蔵一茂
(共同通信ニューヨーク支局次長、元リオデジャネイロ支局長)

2003年の夏からの4年半、リオデジャネイロに暮らしながら通信社の特派員として南米を担当した。その後異動を繰り返し、16年夏からはニューヨークに駐在し、今は主に国連を担当している。南米の記事を書く機会是不够少なくなってしまったが、今でも最も気になる地域だ。

国連で自分が扱った大きなニュースの一つが、昨年7月の核兵器禁止条約の採択だ。米国など核保有国のほか、米国の「核の傘」に頼る日本は参加しなかったが、制定交渉議長を送り出したコスタリカをはじめ、核軍縮に熱心な中南米諸国が採択の原動力になった。

取材の合間、国連の地下のカフェテリアでブラジルの元外交官のドゥアルテ氏にばったり再会した。私がリオ駐在時、彼は軍縮・核不拡散担当大使。取材させてもらったことがあり、懐かしくてしばらく話し込んだ。核実験やミサイル発射を繰り返し、トランプ米大統領との間で激しい応酬が続いていた北朝鮮に話が及ぶと、ドゥアルテ氏は「日本でも核武装に前向きな声が増えたと聞いた。本当か」と心配している様子だった。

リオからよく出張した国の一つが、チャベス政権のベネズエラだった。マドウロ現大統領と同じく当時のチャベス大統領の側近で国営ベネズエラ石油(PDVSA)の総裁

だったラミレス氏は、ニューヨークでベネズエラの国連大使になっていた。パーティーでつかまえて「カラカスで何度も取材を申し込んだのに実現しなかった」と文句を言うと「今は余裕があるから会えるよ」と笑った。ただ、このやりとりの直後に失脚し、国連から姿を消してしまった。

ニューヨークにきた直後、リオ五輪の応援取材で9年ぶりにブラジルを訪ねる機会に恵まれた。様変わりした町の様子に、最初は驚いた。

まず、スマートフォンの普及ぶり。タクシーを拾うと、運転手は慣れた様子で地図アプリに音声で目的地を入力した。ファベラ(スラム)では若者たちがゲーム「ポケモンGO」に夢中だった。かつてのサントスドゥモン空港は初夏になると、古ぼけた壁の割れ目からクッピン(羽アリ)がわき出すように飛び立っていたが、改修工事が終わってピカピカに生まれ変わっていた。ただ、下水の悪臭が立ちこめて丸々と肥えたネズミが走り回るファベラの劣悪な環境や、その困難の中でもたくましく暮らす庶民の様子は、これも驚くほどかつてのまま。うれしくなったり、考え込んだりしているうちに、出張はあっという間に終わった。

これからも機会を捉えて、変わる中南米と変わらぬ中南米の両方を伝えたいと思う。

ポレミックにして貴重なドキュメンタリー映画『ディヴァイン・ディーバ』

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

若き三島由紀夫のリオ体験

『アポロの杯』という、今読んでも魅力的な紀行エッセイ集がある。筆者が随分前に読んだのは新潮文庫版（現在絶版）であったが、著者は三島由紀夫。後年の硬質な皇国主義者としての三島と比較すると、とても同じ人物とは思えないような、欧米文学によって自らを解放し国際派となりつつあった若き作家のはつらつとした文体が冴えている紀行文となっている。

渡航時期は1952年の前半、5か月間ほど。旅行ルートは、北米（ハワイ、米国）～南米（ブラジル）～欧州（スイス、パリ、ギリシャ、イタリア）である。当時の日本はサンフランシスコ講和条約の発効以前で GHQ 支配下にあり、独立国家ではなかった時期だ。日本国民の自由な海外渡航など許可されていなかったのに、まだ20代の三島が海外旅行を出来たのは、父親（高級官僚）のコネで朝日新聞に頼ったからだ。朝日の特別通信員としての海外旅行許可を得て、意気揚々と海外視察に出掛けたワケであり、毎日が興奮状態で旅行を続けたといっただろう。

そんな27歳の東大卒新進作家の筆先が特に「踊っている」のは、ブラジルのところだ。1952年1月27日にサントス・ドゥモン空港に着いてからのリオ滞在は一週間、サンパウロに移動して5日、それから内陸部のリンスへ移動し友人の農場で10日間過ごし、またリオに戻って、カーニバル現場で実体験してから欧州へ、とほぼ4週間にわたってブラジル観光を楽しんでいる。

そんな紀行文の一節が、「一度、たしかにここを見たことがある

といふ、夢の中のやうなものに襲われた」となっているが、この既視感はリオでの感動の日々が背景としてある、と筆者は睨んでいる。すなわち、三島青年はリオでは観光地の見学したりレストランでの食事を楽しんだりしているが、その合間に、少年男娼と複数回「懇親」しており、この「異次元」同性愛実体験が彼のその後の美意識の展開に深く関係している、と思われるのだ。

この三島の体験を、ブラジルサイドから「勝手に解釈」すれば、第二期ヴァルガス政権下のリオはブラ

ジリア遷都前だから名実ともにブラジルの首都であり、政治力も人口もサンパウロを上回っており、多様な文化力でも先進地だった、その自由で豊かなリオを実体験できた、すなわち、リオのいいところ取りした、のが青年作家三島由紀夫であった。



映画『ディヴァイン・ディーバ』の魅力

何故いきなり三島なのか。それは、筆者が試写会会場に出かけ、この110分に及ぶドキュメンタリー映画を見終わった時、何とも不思議な感動を覚えたのだが、その時同時に、何の脈絡もなく、三島由紀夫のリオ「特別」体験のことが脳裏に浮かんできたから、だ。

この映画の背景として、1960年代から70年代にかけてリオにおいて展開された先駆的なゲイ・レスビアン演劇運動があった。当時の軍事政権による思想弾圧の対象にもなったばかりか、保守的なカソリック思想に支配されていた一般社会からも偏見の眼で見られていたから、性的マイノリティーの彼らは家族との関係を絶ったり、海外（ヨーロッパ）に活路を見い出さず、苦しい選択を迫られていた。

いわゆるトランスジェンダーの、女装「ドラッグクイーン」による演劇・歌手活動で中心的な役割を果たしたレジェンドたちが、このドキュメンタリーの主役＝証言者8名であり、この演劇活動50周年のイベントに集まった彼女ら（彼女ら）が、それぞれの体験、自分史を語っている。なかには警察に逮捕されたが、そこから脱走に成功した話もあり、軍政下で権利と自由を求めて闘った者たちの証言としては、実にヴィヴィッドで史料的価値もあるオーラル・データそのものだ。年齢的に70代となっている彼らの語りを聞いていて、筆者も思わず引き込まれそうになったほどのパワーを感じた次第だ。

今でこそ、サンパウロなどで毎年開催される「ゲイ・パレード（現在はLGBTパレード）」は百万人規模の参加者を誇る、世界でも有数の「性の多様性」式典となっているが、この行事が始まったのは1997年でしかない。50年前は、ブラジルには多様なジェンダーを受容する寛容な文化力などなかった。

舞台となったテアトロ・ヒバル（直訳：ライバル劇場）は1934年に創設された老舗シアターであり、エルバ・ハマリョ、ジョアン・ボスコ、ゼカ・パゴジーニョ、アドリアーナ・カルカニョットといったMPBの主役たちが出演するなど歴史ある殿堂であり、1970年からこの劇場の経営を担ったのが、俳優にして演出家のアメリカ・レアルであった。この映画の脚本と監督を務めた女優レアンドラ・レアルはアメリカの孫であり、レアル家という三代にわたって演劇の世界で生きて来たファミリー・ヒストリー的な意味も含有する、奥深いドキュメンタリー映画なのだ。

9月1日、ヒュマントラストシネマ渋谷、シネマート新宿ほかロードショー



エンブラエル社・ボーイング社によるジョイントベンチャー設立

伯エンブラエル社ホームページに掲載されている記事の概要次の通り。

（1）2018年7月5日シカゴ・サンパウロボーイング社及びエンブラエル社はグローバル航空市場における成長を推進するための戦略的パートナーシップを確立するため、覚書に署名したことを発表した。

（2）同覚書は、エンブラエル社の商用機分野を取り扱うジョイントベンチャーの設立を盛り込んでおり、ボーイング社の生産、マーケティング、サポートサービス等が活用されることとなる。同覚書によれば、ジョイントベンチャーの80%をボーイング社、20%をエンブラエル社が所有することとされている。

（3）デニス・マレンバーク ボーイング社会長兼CEOは以下の旨述べた。戦略的パートナーシップ構築に際しては、両社の顧客、従業員及び株主のため、より大きな価値が生み出されるべく十分に準備をしていくとともに、本パートナーシップは同社の成長及び出資に対する株主へのリターンに関して長期的かつ戦略的な視点に基づくものであることは明らかであり、我々の成長計画を深化・加速させるものである。

（4）パウロ・セザール・デ・ソウザ・イ・シルヴァ エンブラエル社社長兼CEOは以下の旨述べた。ボーイング社との覚書は航空機産業における重要なパートナーシップを生み出すこととなり、世界市場におけるリーダーの地位を強化するとともに、同社との連携は伯航空産業、生産能力の増強、雇用・売上げ・投資・輸出の増加といった好循環のサイクルをもたらす、顧客、株主及び従業員に大きな価値を付与することになる。

（5）エンブラエル社の商用機のオペレーション及びサービス部門がジョイントベンチャーに100%移転することとなり、価値総額は47.5億ドルとなる。そのうちボーイング社が80%に相当する38億ドルを出資することとなる。ジョイントベンチャーは（2019年までに設立されることから）、2020年にはボーイング社の決算に計上され、税引き前で年間1.5億ドルのコスト削減が見込まれる。戦略的パートナーシップは、20年以上前からの両社の協力関係を踏まえれば自然な進化である。

（6）ジョイントベンチャーは、伯に本部が設置され、社長及びCEOを含めた幹部クラスによって経営され、ボーイング社が経営・支配権を握ることとなる。ジョイントベンチャーは、プロジェクトの発展、商用機の製造・メンテナンスのための核の一つとなるとともに、ボーイン

グ社の製造チェーンに完全に組み込まれることになる。その結果、ボーイング社及びジョイントベンチャーは、70～450席の旅客機から貨物機に至る幅広いラインナップを提供することとなり、ハイレベルの製品・サービスを提供することとなる。さらに、両社はKC-390機のような防衛機の新市場へのプロモーション等を取り扱うジョイントベンチャーも別途創設予定である。

（7）ジョイントベンチャーのファイナンス・経営の詳細に関する交渉は今後も行われる見込みであり、その後、株主、伯政府等の承認を経ることとなる。予定通りに進めば、2019年末までにジョイントベンチャーへの移転が完了する見込みである。

（8）ボーイング社及びエンブラエル社は、経営資源、より広範なプレゼンス、グローバルサプライチェーン、セールス、マーケティング等においてよりハイレベルの効率性を獲得することになる。さらに、製造及び開発においてグッドプラクティスを共有することになる。

メルコスールと太平洋同盟が合意

7月24日、伯大統領府は、ブラジルを始めとするメルコスールが太平洋同盟諸国と共同宣言に署名した旨発表した。概要以下のとおり。

（1）24日（火）、メキシコで行われた第1回のメルコスール・太平洋同盟首脳会談において、ブラジルと他のメルコスール諸国は、2つの同盟ブロック間の貿易関係を深化するための共同宣言に署名した。共同宣言の主な意図は、対外貿易を促進するための官僚主義の削減である。

（2）両グループを構成する国々は、南米のGDPの90%を占めており、協定は、学術分野交流、観光や文化等の分野に関するものである。ブロック間での協定に加えて、ブラジルはまたメキシコとの間の自由貿易分野での緊密化を図っている。

（3）テメル大統領は「我々は各国間のFTAに署名したところであり、各国大統領の様々な発言の中に熱意を感じている。」と述べた。

メルコスールFTA：ブリュッセル閣僚会合の結果

7月18日及び19日にブリュッセルで行われたEU・メルコスールFTA交渉に関し、19日付けエスタード・デ・サンパウロ紙は、「EUとメルコスールFTAは合意に至らず、伯政府はもはや成果を信じていない」と報じた。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『最初物語』

(J・ギマランイス・ホーザ著、高橋都彦訳)

作家ギマランイス・ホーザの作品は難解なことで知られ、文学研究者から「ポルトガル語のジェームス・ジョイス」と称されるが、水声社版「ブラジル現代文学コレクション」の第四弾は、このホーザの短編集だ。収録されている佳作『第三の川岸』はモザンビークの作家ミア・コウトに「人生を変える」ほどの激震的インパクトを与え、ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス監督によって映画化もされている。味読する価値のある名作集だ。

(水声社 2018年5月 271頁 2,200円＋税)

『移民の魁傑・星名謙一郎の生涯』

(飯田耕二郎著)

青山学院で学びキリスト教伝道師としてハワイへ移民し、その後テキサスへ転進した後、ブラジルの初期移民の

リーダーとして活躍した星名謙一郎。言論人としては邦字紙『週刊南米』を発行し、サンパウロ内陸部の開発（ブレジョン植民地経営）でも実績を残しているが、今ではほとんど忘れ去られている。1926年事故死しアルバレス・マシャードに眠る星名に関する初めての本格的評伝だ。長年に亘る史料調査や関係者取材を踏まえた労作だ。

(不二出版 2017年11月 330頁 3,800円＋税)

『移民政策のフロンティア』（移民政策学会設立10周年記念論集刊行委員会編）

2008年に創設された移民政策学会が設立10周年を記念して学会の総力をあけて集成した論考集だ。多文化共生政策の展開と課題、出入国政策をテーマ毎に論じ、社会統合政策では外国人学校の事例として朝鮮学校やブラジル学校についてコンパクトに叙述している。第5章の、10周年記念座談会を読むと、この現会員数400名の学会が、法学者から提起されて創設され、学際的に「日本の歩みと課題を問い直す」姿勢で一貫していることがわかる。

(明石書店 2018年3月 292頁 2,500円＋税)

『ラテンアメリカ所得格差論』（浜口伸明編）

①所得格差問題からラテンアメリカを視る意義と意味、②ラテンアメリカにおけるグローバル化と所得格差の関係、③ラテンアメリカにおける所得分配と社会政策、④ラテンアメリカの格差社会に対抗する連帯経済という選択、⑤メキシコにおける所得格差の変遷、⑥ブラジルにおける経済発展と格差縮小の要因、が各章のタイトル。第六章で、ブラジル経済史における所得分配構造をマクロで把握したうえで発展と格差縮小の共存を論じている。

(国際書院 2018年8月 256頁 3,500円＋税)

『ネイマール ピッチでくりだす魔法』（マイケル・パート著、樋渡正人訳）

ロシアW杯でブラジルは準々決勝で敗退したが、ブラジル国民の希望の星ネイマールは「過剰倒れ込みパフォーマンス」を連発しすぎ、世界中の子供たちが「ネイマールする」ことを真似てしまった。そんなマイナスイメージが付いてしまったネイマールだが、本書を読むと彼の天性の天真爛漫さと練習によって鍛え上げられた足の技術の“カクテル”の魅力に惹かれることになる。小学校中級以上を対象とするポブラポケット文庫の一冊。

(ポブラ社 2018年4月 208頁 700円＋税)

!!「びっくり豆知識」!!

ブラジルが「普通に」勝てる時代は終わった

ブラジルがワールドカップ（W杯）で勝つのは「当たり前」だと思っていた。でもどうやら時代が変わったようだ。それを「革命」と呼ぶ人もいる。6～7月のロシアW杯をじっくり観戦すると、常連の強国と新興国の差がなくなっていた。小が大を食う番狂わせが相次いだ。ブラジルもその大きな流れに飲み込まれ、ベスト8で涙を飲んだ。

差がなくなったのはなぜなのか。サッカー評論家はその理由をいくつかあげている。ひとつは守備を固め、必殺の高速カウンターで「窮鼠、猫を噛む」戦術が効果を発揮したこと。2番目は世界的に技術レベルが同質化し、ロナウド、メッシ、ネイマールらスタープレイヤーの個人技が活かせなかったこと。3番目はVAR（ビデオ・アシスタント・レフェリー）の導入で強国伝統の“ごまかし”が効かなくなったこと。4番目はベテランを超える若い世代の力が伸びてきたこと——などに尽くされる。

筆者はもうひとつ、誰も指摘していない理由をあげたい。出場国全体の「ブラジル化」が進んだことである。ブラジル・サッカーの象徴はあのペレである。ペレは最初にW杯に出た時に「なんで黒人がいないんだ」と不思議がったという。もちろんアフリカ諸国は日本が苦戦したセネガル以外でも強国が次々に誕生し、出場国枠も5カ国となり、人種問題は今は

昔の物語である。

ブラジルはペレの時代からアフリカ系黒人、混血、白人の「人種混合チーム」だった。独創的、スペクタクルなブレース・スタイルは「多人種混合」による底知れない強さとみられていた。世界の「ブラジル化」とは、多人種混合スタイルが広がったという意味だ。ロシア大会で優勝したフランス代表にはエムバペ、ボグバをはじめ数人のアフリカ系選手がいた。4強のイングランドのスターリング、ベルギーのルカクも必殺技を持つ切り札だ。欧州チームにはいつの間にか、旧植民地のアフリカなどから来た超人的選手が増えていた。アフリカ系の走力は見えての通り。ジャマイカの陸上選手の英雄ボルト並みだ。

「ブラジル化」の拡大によって相対的に本家ブラジルの「頭ひとつ抜けた強さ」がなくなってきた。世界最高のW杯5回優勝は今でもブラジルの誇りだし、「サッカー王国」たらしめている。しかし、「勝つサッカー」より「魅せるサッカー」——などと悠長に構えていたら足元をすくわれる。それが今回のロシア大会だった。2002年以降、ブラジルが優勝から遠ざかっているのは不思議ではない。

ブラジルがW杯で早々に敗退すると、心にぽっかり穴があく「ブラジル・ロス」になると名言を吐いた新聞記者がいた。そう感じるブラジル派は少なくない。(W)



価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料：14,000円／月（税別）

CRONICA（クロニカ）

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料：30,000円／月（税別）



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

協会イベントのご案内

参加のお申し込みは、協会HP
お申し込みフォームにてお願いします

9/14 アンジェロ・イシ武蔵大学教授 講演会
演題：ブラジル移民110周年とデカセギ30周年を再考する
日 時：2018年9月14日(金)14:00～15:30
場 所：米州開発銀行アジア事務所会議室（内幸町 富国生命ビル16階）
参加費：無料

9/15 ブラジル駐在員帯同家族（駐在夫人）
ガイダンスセミナー
日 時：2018年9月15日(土)12:00～17:00
場 所：日本ブラジル中央協会 会議室
参加費：3,500円

11/2 コヘア・ド・ラーゴ駐日ブラジル大使 講演会
演題(仮)：駐日大使としての5年間を振り返り(及び最近のブラジル情勢)
日 時：2018年11月2日(金) 10:30～12:30
場 所：国際協力銀行 9階 講堂(予定)
参加費：無料

11/14 コヘア・ド・ラーゴ駐日ブラジル大使 送別会
日 時：2018年11月14日(水) 18:30～20:30
場 所：和田倉噴水公園 レストラン
参加費：10,000円
主 催：在日ブラジル商工会議所
共 催：日本ブラジル中央協会

楽しく学ぼう！学んで話せるポルトガル語

秋期ポルトガル語講座 受講生募集中!!

9月開講 お申込みはこちらから <http://nipo-brasil.org/portugal/>

— 皆様のご入会を心よりお待ちしております —

法人・個人



新規会員募集中

会員数 2018年8月現在
法人会員 123社
個人会員 約320名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます（会員限定イベントへも参加いただけます）
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

《日本ブラジル中央協会公式HP》

<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイジア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

39年間
南米一筋

驚き! 感動!!

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。
航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社: ユナイテッド航空、デルタ航空、アメリカン航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、
イベリア航空、プリティッシュ・エアウェイズ、ターキッシュエアラインズ、エミレーツ航空、カタール航空、
アエロメヒコ航空、ラタム航空、ニュージーランド航空、アルゼンチン航空、ゴル航空、コパ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館(東京、浜松、名古屋)の登録業者です。
観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輛の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル
(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号
社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員
TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル



e-mail: info@alfainter.co.jp



BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL
YOU
CAN
EAT | 食
べ
放
題

予約:
www.brasilicagrill.com

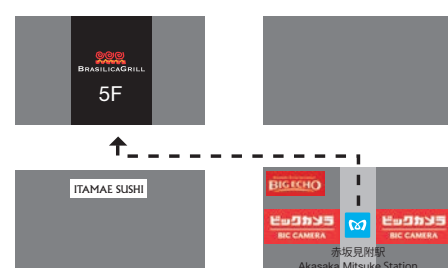
〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅
徒歩2分



C 赤坂駅
徒歩6分

永田町駅
徒歩6分



溜池山王方面
Tameike Sannou
赤坂見附駅 10番出口
Akasaka Mitsuke
EXIT 10
銀座線
丸の内線
青山一丁目方面
Aoyama Ichome
Ginza Line
Marunouchi Line

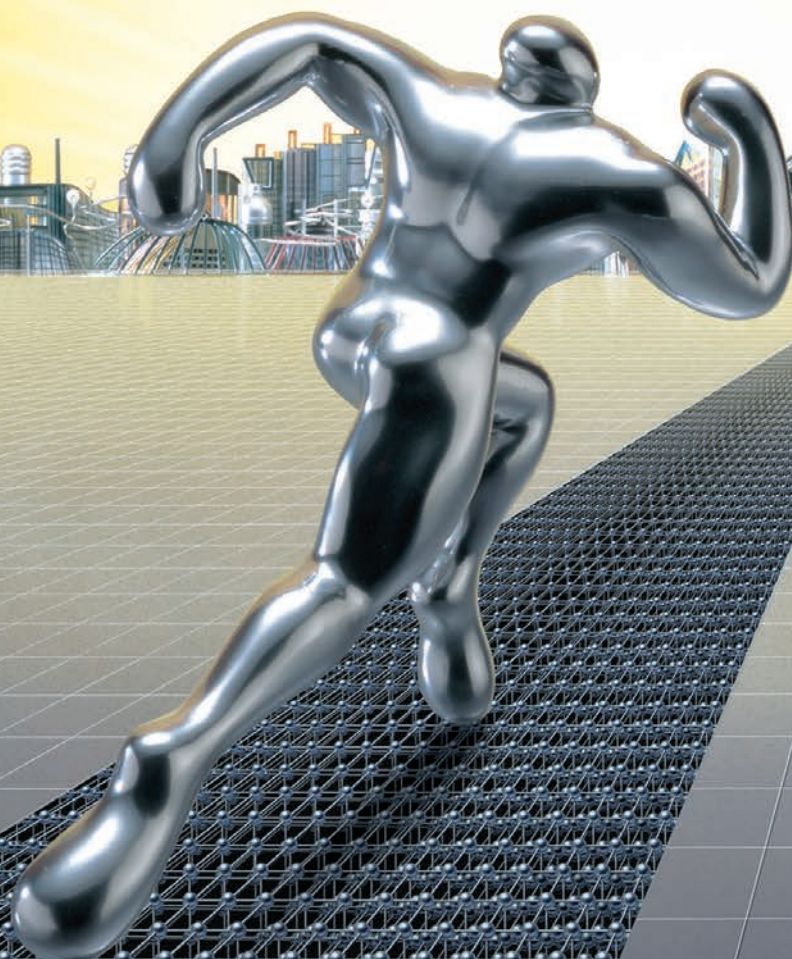


新日鐵住金

あらゆるものづくりを支え、
いつの時代も未来を拓く素材の主役、鉄。
その大いなる可能性を極限まで追求し、
日本と世界の発展、そして豊かな社会の創造に
貢献することが、私たち新日鐵住金の使命です。
世界最高水準の技術とものづくりの力で、
もっとグローバルに、もっと先進の鉄へ。
「総合力世界No.1の鉄鋼メーカー」をめざす、
私たちの挑戦に限りはありません。

www.nssmc.com

限らない
鉄の未来をめざす。



世界の鉄へ

しんにつつすみきん